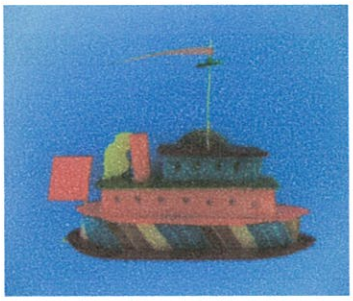
第145回

樟脳船

野木村政三

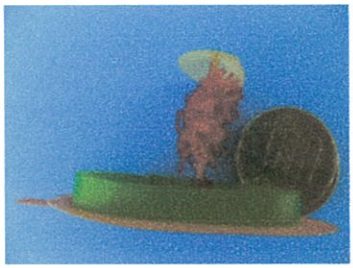
セルロイドハウス横浜館１Ｆの展示ガラスケースの中に、右の写真の大変古くなった「おみやげ」の紙箱が３個あります。

「おみやげ」の紙箱の中に、セルロイド玩具の樟脳船が計13個と樟脳の包み紙及び滑走法の解説文が入っています。樟脳は蒸発してしまって紙だけです。

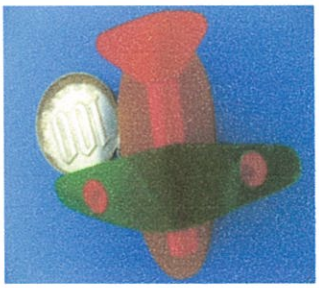


この樟脳船は、滑走法の文体からして俗に大正ロマンと言われた1920（大正９）年前後の製品と思われます。

当時、セルロイドの生地で作った樟脳船は、東京浅草や各地の縁日でも売られていましたが、殆どが諸外国に輸出されていました。

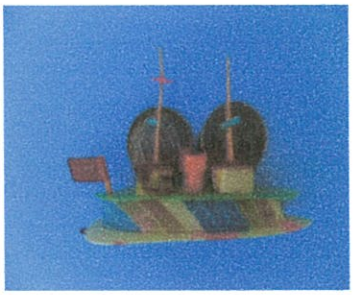


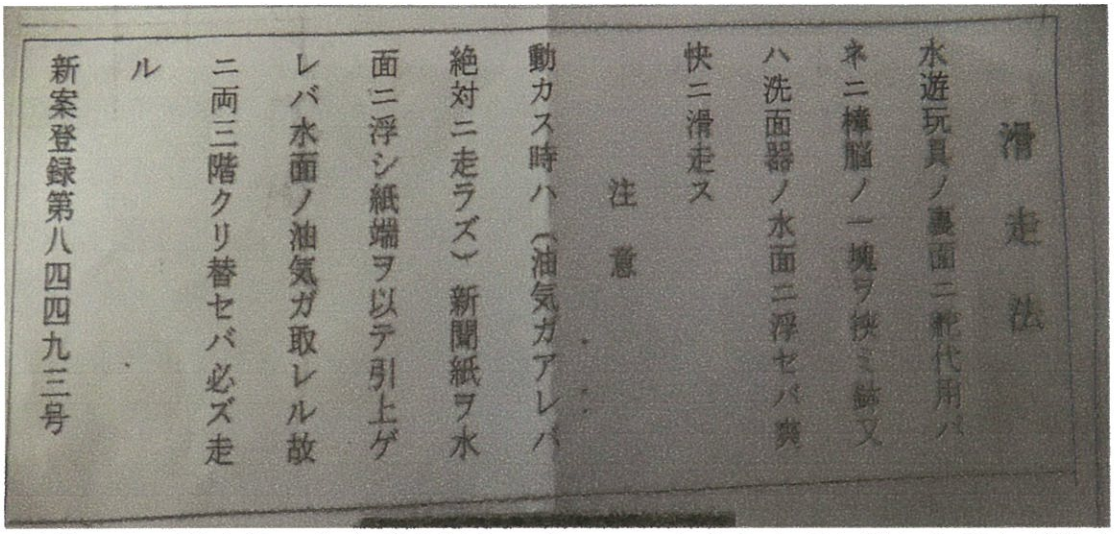
この樟脳船は写真の通りに軍艦、外国航路客船、飛行機、など時代を象徴した絵柄になっています。



大きいものは長さが５㎝、小さいのは100円玉と比較した写真の通りです。

どれも素晴らしいセルロイドの工芸品です。優れた工芸職人でなければ作れなかった名品、と思います。





滑走法

水遊玩具ノ裏面ニ代用ハ
ネニ樟脳ノ一塊ヲ挟ミ鉛又
ハ洗面器ノ水面ニ浮セバ爽
快ニ滑走ス

注意

動カス時ハ（油気ガアレバ
絶対ニ走ラズ）新聞紙ヲ水
面ニ浮シ紙端ヲ以テ引上ゲ
レバ水面ノ油気ガ取レル故
ニ両三階クリ替セバ必ズ走
ル

新案登録第八四四九三号

紙箱の中の滑走法の文章が文語体です。このような文章を読むと私など戦中派の者は、中学校の軍事教練の時間に天皇から下賜しれた勅語や軍人勅諭を暗証させられたこと、を思い出してしまいます。

昭和年代の初期は経済恐慌、昭和 6 年の満州事変、昭和 7 年の五一五事件、昭和 11 年の二二六事件、昭和 12 年 7 月 7 日に日支事変勃発。「贅沢は敵」が国民標語になりました。

そして遂に 1941（昭和１６）年１２月８日、英米に宣戦布告。

大正生まれの長兄が横須賀の海軍に召集されました。私は昭和 19 年 10 月陸軍幼年学校の試験終了後、東武電車で帰宅の前に浅草寺にお参りしましたが参道両脇の商店街も寂しいものでした。間もなく米軍の空爆。敗戦になり食料難、住宅難の時代となりした。

そんな激動の時代に育った私の思い出の一つに、樟脳船があります。

小学校 1、２年生は、Ａ４の大きさの石盤（せきばん）に蝋石（ろうせき）でア・イ・ウ・エ・オと書いて文字書きを習いました。3 年生になるとＢ５紙のノートを使用するようになり、薄いセルロイド板を「下敷き」にして鉛筆で文字を書いたものです。学用品は小学校前の矢島文具店で売っていました。

２人の兄がセルロイドの「下敷き」を鋏で切り、セメダインを使って 3×２㎝位の帆かけ舟を作っていました。それを盥（たらい）に浮かべて、樟脳を舟の尻に載せると舟が水上を走りました。

当時の下着などは、盥（たらい）に水を入れ洗濯板に載せて石鹸でごしごしと汚れをと

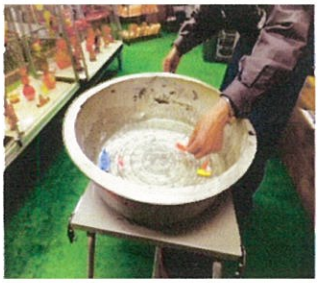
り水ですすぎ天日に干していたのです。それは母親の朝の重要な仕事でしたが子供達も手伝っていました。盥(たらい)は、今の電機洗濯機の原型といえるでしょう。

当時は、何れの家にも箪笥の中に、虫よけ用の樟脳が沢山容れてありました。樟脳は近所のタバコ屋で売っていました。タバコと樟脳は専売品で、大蔵省の管理下にあったのですが、戦後は日本専売公社に移行しました。

以上が厳しい国家の政治経済社会にありながらながら、私ら子供たちが手軽に樟脳船遊びに興ずることが出来たことの次第です。

セルロイド業界は、大正初期から昭和12年頃までが全盛期でした。戦後はオキュパイドジャパンで復活しました。日本の財政困難の中で、セルロイド製品が輸出産業として外貨の稼ぎ頭でした。その理由は、商品の品質が良く、セルロイド原料の樟脳の生産が盛んで価格が格安のうえ、労賃も低かったからです。当時は、樟脳が日本の特産品でした。

＊＊＊



説明書に従って、アルミの金盥(かなたらい)に水をいれてから新聞紙を水面一杯に広げます。ずぶ濡れの新聞紙を取り出してバケツに捨てます。これを3回繰り返します。

舟の尾ひれに樟脳を1粒載せて、水面に浮かべると舟が走りだします。100年前の古びた説明書が、現代に確りと生きていることを実感できます。

＊＊＊

東京・台東区の(株)山縣商店さんは江戸時代から続く花火の問屋です。ある下請けの花火工場が廃業したとき多量の樟脳を引き取りました。その樟脳の利用法として考案したのが「しょうのう舟」を作って販売することでした。もちろん、舟の材料は今の時代ですからプラスチックです。

左写真の競艇ボートは、25㎝
戦艦は、20㎝
2艘とも、セルロイドハウス横浜館に展示中のセルロイド製品で彩色も鮮やかです。これらも矢張り輸出商品で大正年代の作品と推定されます。

＊＊＊

樟脳船は江戸の昔からあった、と聞きましたので国立・国会図書館を尋ねました。図書館で当方の要件を伝えると、古典籍資料室（江戸期以前の和古書、清代以前の漢書などの貴重書・準貴重書を保管閲覧場所）に案内されました。

そこで、フイルムに収められた「神仙秘事睫上巻『しんせん・ひじ・まつげ』」を見せていただきました。

室長の教示に従い、フイルムを右手でゆっくり回していると右の図が目にとまりました。「これが樟脳船かな？」と考えました。部屋のコピー機使用は自由でしたが、この１枚と他にロウソク遊戯などとあわせて計5 枚を撮ったことを室長に申告いたしました。

「神仙秘事睫」の作者はイ電、出版者は柏原屋与左衛門で 1742 年製作という説明を受けました。この図に描かれた「紙人形の水上廻り」には樟脳の表示はありませんが、仕掛けのネタはやはり樟脳である、と思われます。

1742 年は、江戸幕府 8 代・徳川吉宗の時代です。この頃すでに樟脳が江戸にも出回っていたからです。

日本では 1688 年～1703 年、鹿児島・薩摩藩が琉球からの流民（高麗人ともいわれています）に教えられて、楠を原料にした樟脳を多量に製造するようになっていました。楠は古来より九州・四国地方に多生する常緑樹です。　（了）

参照・日本専売公社昭和 31 年刊「樟脳専売史」、
昭和 37 年刊「続しょうのう専売史」
（セルロイドハウス横浜館図書室在庫）

《横浜館に樟脳のコーナーが出来ました》